

吉備国際大学研究紀要  
(人文・社会科学系)  
増刊号, 93-98, 2017

## 教員養成課程における地域小学校との 連携事業を通じた学生育成に関する研究

高田 康史\*・堀田 治\*\*

### A Study of Teacher Education between Elementary School and Teacher-Training Course

Yasufumi TAKATA, Osamu HORITA

#### Abstract

**In this study, we did a project called “KIBIKOKU ASOBITANKENTAI” that teaching traditional plays and group plays at elementary school in Okayama Prefecture. This project did between Elementary School and Teacher-Training Course. The purpose of this study is to get the basic data for Physical Education Teacher education program.**

**Key words** : Teacher-Training, Teacher Education, Physical Education,  
Project between Elementary School and University

**キーワード** : 教員養成、教師教育、体育科、小大連携

---

\*吉備国際大学心理学部  
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8  
*Kibi International University*  
8, Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan(716-8508)

\*\*高梁市立川上小学校 教諭  
〒716-0201 岡山県高梁市川上町地頭1323  
*Takahashi Municipal Kawakami Elementary School*  
1323, Jitou Kawakami-cho Takahashishi, Okayama, Japan(703-8516)

## 1. はじめに

近年、大学、とりわけ、私立大学との地域社会との連携が重要視されており、様々な大学と地域自治体などの連携事業が進められている。平成20年度文部科学白書では「大学の有する知的資源を初等中等教育でも活用して、児童生徒の知的関心を高めることも大変有意義です。」<sup>1)</sup>とされている。日本私立大学協会附置私学高等教育研究所(2015)の報告では、「地方創生が国策の中心の一つとして浮上し、地方の活性化と人材育成の中核としての大学の役割がかつてなく注目されている。(中略)しかし、大学の本業である教育や研究についての調査研究は多くの蓄積があるが、地域連携の現状や在り方、意義についての調査・研究はまだ始まったばかりで、ましてやそのマネジメントの全国的な動向や在り方についての本格的な調査・分析は、ほとんどないのが現状だ。」<sup>2)</sup>と述べられており、我が国の私立大学と地域連携に関する研究や報告の充実が急がれる。

一方、本研究の主題である体育科での教員養成に関して、実践指導力を養成する方法の一つに模擬授業があげられる。模擬授業の重要性については、これまでに様々な研究によりその報告がなされている。先行研究としては、向山ら(2001)<sup>3)</sup>(2002)<sup>4)</sup>、長谷川ら(2003)<sup>5)</sup>、木原ら(2008)<sup>6)</sup>(2009)<sup>7)</sup>などが存在し、その成果としてインストラクション技術やマネジメント技術の向上、相互作用頻度の増加に加えて、教師としての働きかけが具体化するなどが挙げられる。

Strand(1992)<sup>8)</sup>の報告によれば、米国の調査では、教育実習前に平均82時間の学校体験を行っているとの報告がある。教員養成系大学で学生の体育科における実践力を養成して学校現場へ送り出すためには、模擬授業や教育実習のみならず、課外活動での実地経験も重要で貴重な経験の場の一つであると考えられる。

小大連携事業での学生育成の成果に関する報告を以下に示すが、管見の限りその報告は僅かである。YUKAWA(2012)<sup>9)</sup>は、英語活動プロジェクトに参加し

たボランティア学生への効果を考察している。そこでは、プロジェクトが高いレベルで仕組まれていることにより、学生は負担なく参加でき多くの貴重な学びを得られるとされている。また、花崎ら(2016)<sup>10)</sup>は、学生の内発的動機付けを高めるきっかけ作りとして英語科指導を行っている。しかしながら、いずれの報告においても英語科での活動であり、体育科に関わる小大連携事業の成果や報告、また教員養成に繋がる学生育成の成果に関する報告は管見の限りみられない。

そこで、本研究では、教員養成課程において、地域小学校と行った小大連携事業を通じた学生の育成に関する報告を行う。本研究では、吉備国際大学で行われた「キビコク遊び探検隊」に着目する。「キビコク遊び探検隊」での学生の振り返りにスポットを当て、教員養成課程での学生育成、とりわけ、体育科での実践指導力向上のための一助となる基礎資料を得ることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 1) 連携事業「キビコク遊び探検隊」について

キビコク遊び探検隊とは、吉備国際大学学生が川上小学校にて行う、伝承遊び・集団遊びの紹介及び体験の事業である。学生は「キビコク遊び探検隊」として、月1回程度川上小学校を訪問し、全校児童に伝承遊び・集団遊びの紹介を行った。ここで紹介した伝承遊び・集団遊びは、学校の休み時間や業間休み、放課後などの時間に児童が活用できることを目的とした。「キビコク遊び探検隊」として紹介する伝承遊び・集団遊びの企画及び実際の紹介場面での運営は、吉備国際大学教員及び学生によって行った。活動の上での学生の意識付けとして、「児童の様子に応じて臨機応変なルール変更を行う」よう共通認識した。また、川上小学校では、小学校において体育科の時間のうちの「体づくり運動の領域」と位置付けている。

### 2) 平成28年度「キビコク遊び探検隊」実施内容

平成28年度の「キビコク遊び探検隊」における実施

内容は以下の通りである。

各月の内容は、1回目：6月「けいどろ」、2回目：9月「天下」、3回目：12月「6むし、手つなぎドッチ」、4回目：1月「3すくみ・うさぎ狩り」であった。

### 3)対象

本研究における対象は、「キビコク遊び探検隊」に参加した学生4名である。この学生は全て小学校教諭を志望する大学3年生である。

### 4)自由記述について

該当学生に対して、毎回の実施後に「本日の指導での成果、課題が残ったところ」に関して自由記述で回答させた。

### 5)分析方法

テキストマイニングソフトKh orderによって上記の自由記述を元に「共起ネットワーク」を作成した。これを元にグルーピング、ラベリングを行った。グルーピング及びラベリングに関しては、大学教員1名、小学校教員1名で行った。

## 3. 結果及び考察

学生が毎回の活動終了後に書いた自由記述について、テキストマイニングソフトKh orderを用い「共起ネットワーク」を作成した。図1は、12月(3回目)の「本日の指導での成果」に関する共起ネットワークである。これを元に自由記述をグルーピングし、ラベリングした結果を表1に示す。

### 1)活動での成果について

#### (1)遊びの本質について

表1より、学生は毎回の成果として“遊びの本質”に関して記述していた。自由記述の原文(以下原文)には、「6ムシの例は、ボール一つだと走る側が勝つ。ボール2つだと投げる側が勝つ。」(3回目)との記載があった。実際の子どもとの関わりの中で、当該回の遊びの本質や楽しさをより深く理解していることがわかる。この“遊びの本質”に関する記述は、いずれの回においても活動の成果としてあげられている。学生

は実際の子どもとの関わりを通して、講義や模擬授業、学生同士で行う“遊び”の中では得られない実地経験ならではの実感や感覚を得ている可能性がある。このことから、実地経験が遊びの特性や楽しさ、ルールなどに対するより深い理解を促すと考えられる。

#### (2)声かけについて

続いての成果として“声かけ”があげられている。表1より、1回目、2回目、4回目にその記述が見られた。原文には、「いいプレイを見たら即時フィードバックするよう声かけを意識して実践」(4回目)したとあり、講義で学んだ相互作用をうまく実践できたことを成果として捉えている。このように、実際の子どもへのフィードバック場面があることで、講義の学びをさらに強化できるところが、小大連携で実地経験の特色であると考えられる。また、“声かけ”に関しては、1回目や2回目の段階では、原文に「最後子どもたちが教室へ帰る時に『またね』と声かけした」(1回目)など、直接の指導場面に関わらない声かけが記述されていたことに対し、4回目には「いいプレイを見たら即時フィードバックするよう声かけを意識して実践することでそのプレイが周りにも広がる姿見られた」(4回目)と遊びや活動に直接関わる記述がみられるようになった。このように、同じ“声かけ”に関しても、回を追うごとに

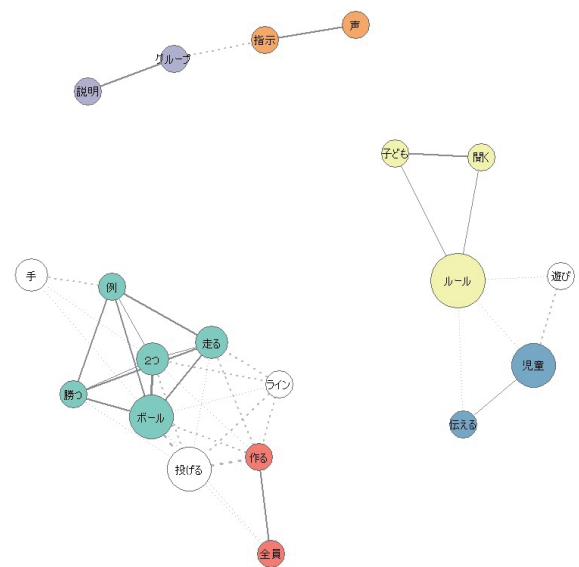


図1 共起ネットワーク 12月「本日の指導での成果」

表1 「キビコク遊び探検隊」参加学生の捉えた成果と課題

	6月	9月	12月	1月
成 果	遊びの本質	遊びの本質	遊びの本質	遊びの本質
	声かけ	声かけ	説明・指示	声かけ
	ルールの内容		ルールづくり	説明・指示
				学生の関わり
課 題	説明・指示	説明・指示	説明・指示	説明・指示
	ルール変更	示範	参加機会の平等	ルール
	学生の連携	事前の想定	学生の連携	学生の連携
	事前の想定	遊びの内容・工夫	遊びの内容・工夫	事前の想定
			マネジメント全般	

学生の声かけや関わりの質が向上している様子もうかがえた。

### (3)ルールについて

“ルール”については、表1より、1回目、3回目にその記述がみられた。本研究における「キビコク遊び探検隊」では、児童の実態に応じて、学生は臨機応変にルール変更を行うよう共通認識している。原文では、「ルールの工夫は回数を重ねる毎に児童の方から『警察に泥棒の人数が上手くいってない』『制限時間ないの?』など回数を重ねる毎に意見がでて、それを組み込むことで段々と精練されていった。」(1回目)と1回目の活動時より、臨機応変なルール変更の対応を求められる場面があったことがうかがえる。ルール変更に関しては、児童の発達段階や運動能力への理解、実態把握などが必要不可欠であり、学生がこのような経験を成果として捉えられていることは「キビコク遊び探検隊」の現地経験としての有効性を表していると考えられる。また、3回目の記述には、「ルールをかえていく時にだんだん難しく段階を踏みながらできたのは良かった」(3回目)とあり、ルール改変の際に、徐々に児童段階を上げていくなどの工夫をしたこともみとれる。学生は、現地経験の中でより児童や遊びへの理解が深まり、ルール変更の方法に関しても回を追うごとにスキルアップしているのではないかと考えられる。

### (4)説明・指示について

“説明・指示”については、模擬授業で高まる技術であるのは先行研究より明らかとなっている。表1より、それらに関する記述が、3回目、4回目にみられた。原文には、「ポイントを押さえて話すことができた」(4回目)「児童の目線に合わせて話をすることができた。」(3回目)との記述があり、学生は「キビコク遊び探検隊」で説明や指示を的確にできたことを成果としている。また、「グループ内の学生とうまく連携がとれたため、説明や仕切りがうまくいった」(4回目)とあるように、活動の中で他学生と連携しながら説明することもできたようである。教員になれば、他の教員と共同して説明する場面が少なくないと考えられるが、「キビコク遊び探検隊」の特性上、この記述のように複数人で協力して説明する場面もあったといえ将来に活かす経験ができています。

## 2)活動での課題について

### (1)説明・指示について

課題としていずれの回にも上がっていたのは“説明・指示”である。原文には、「天下の時に説明があらちこいってしまったので大きな説明から小さな説明をするようにすればよかった」(2回目)との記述がみられた。“説明・指示”に関しては、説明の内容はもとより、「説明の時に自分の体がふらふらしていたと思うのでその

ふらふら無くした方がいい」(2回目)や、「説明に時間がかかったりしてしまったため」(3回目)など、その方法に関する記述も多くみられた。また、「説明・指示」に関しては、成果としても上がっていた項目であった。成果としては、3・4回目に、課題としては毎回の記述でみられたことより、学生は回を重ねるごとに自身の説明や指示に自信を持てるようになり、成果としても捉えられるようになると考えられる。

#### (2) 事前の想定及び学生の連携について

“事前の想定”に関する記述は、1回目、3回目、4回目にみられた。原文には、「遊びの中でどのような児童の姿がみられその時にそのような対応をするのかの事前の想定が足りていなかった」(1回目)と記述されていた。やはり、学生は児童と日常的に触れ合う機会の少ないため、児童の姿を事前に想像するのは難しいようである。また、“学生の連携”については、成果の場面でも自由記述の一部でその様子がみてとれたが、課題としても1回目、3回目、4回目にみられた。原文では、「今の遊びが終わるのか吉備国のメンバーがわかかっていなかったりと問題があったので遊びの切り替えタイミングや終わりのタイミングをちゃんと決めなければならない」(4回目)との記述があった。本実践では、事前のミーティングについても学生同士で行っているが、細かい部分まで想定できていない場合もありその部分を課題として捉えているといえる。

#### (3) 遊びの内容や工夫について

“遊びの内容や工夫”については、表1より、2回目、3回目にその記述がみられた。原文には「ボールが遠くに飛んでいき、時間ロスする場面が多く見られた。せっかく半分に割った人数でしていたので半分の子にコートを囲ってもらい素早くゲーム再開ができるようにするなどの短時間の中でしっかりとあそべる工夫を考えればよかった」(2回目)とあり、遊びの方法に関する改善点に言及していた。遊びそのものに関する記述は、成果においてもみられたのは前述した通りである。他の項目についても同様であるが、学生が成果と

捉える項目は、同時に課題も認識しやすい項目であると考えられる。遊びに関して言えば、学生は「キビコク遊び探検隊」の活動を通して児童と実地経験をする中で、遊びの本質や楽しさ気づくとともに、同時に遊びの方法に関する改善点にも気づき、そこを自身の課題であると捉えている。

## 4. まとめ

本研究では、教員養成課題における小大連携事業を通じた学生の育成に関して研究を行った。「キビコク遊び探検隊」での学生の振り返りにスポットを当て、学生育成のための一助となる資料を作成することを目的とした。

学生は、模擬授業や講義とは違う実地経験を通し、成果と課題を以下のように捉えていた。

#### ① 活動での成果

“遊びの本質”により深く迫れたこと。“説明・指示”“声かけ”が実践できたこと、“ルール”の改変等を臨機応変に対応できたこと。

#### ② 活動での課題

“指示・説明”の方法や内容の未熟さや、児童理解を含めた“事前の想定”の甘さ、“学生の連携”不足。また、“遊びの内容や工夫”について、教材自体の理解不足。

本実践では、上記の成果と課題について、学生が認識できたことに意義があると考えられる。正課の講義や模擬授業、教育実習に加えこのような地域連携活動での実地経験が、より充実した学生育成に繋がる可能性が示唆された。

また、地方私立大学は、地域と連携することにより、知の還元や地域の活性を行う責務がある。大学-地域がwin-winとなれる事業が今後日本各地で広がっていくことを期待する。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省 (2008) 地域の発展と大学. 平成20年度文部科学白書 第1部 第2章 第2節.  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpaa200901/detail/1283348.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa200901/detail/1283348.htm) H29.6.30現在)
- 2) 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所 (2015) 地域連携活動の意義と推進マネジメントのあり方を考える (2015年3月). 私学高等教育研究叢書3.  
([https://www.shidaikyo.or.jp/riihe/book/pdf/2015\\_03.pdf](https://www.shidaikyo.or.jp/riihe/book/pdf/2015_03.pdf) H29.6.30現在)
- 3) 向山貴仁・山崎利夫 (2001) 体育授業における授業スキルの向上を目指した模擬授業の検討. 体育科教育学研究, 17(2), 11-28.
- 4) 向山貴仁・山崎利夫 (2002) 実践的な保険体育教師の育成を目指した模擬授業の改善-鹿屋体育大学における平成12・13年度の取り組み-. 体育科教育学研究, 18(2), 13-22.
- 5) 長谷川悦示・岡出美則・高橋健夫 (2003) 筑波大学における体育教師教育カリキュラム及び指導法の検討:「体育理論・実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業展開. 筑波大学体育科学紀要, 26, 69-85.
- 6) 木原成一郎・日野克博・米村耕平・徳永隆治・松田恵示・岩田昌太郎 (2008) 教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究-テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素-. 広島大学教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域, 57, 69-76.
- 7) 木原成一郎・日野克博・米村耕平・徳永隆治・松田恵示・岩田昌太郎 (2009) 教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究 (その2) -テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素-. 学校教育実践学研究, 15, 29-37.
- 8) Stand, B, N. (1992) A descriptive profile of teacher preparation practices in physical education teacher education teacher education. *Physical Educator*, 49(2), 104-112.
- 9) YUKAWA Emiko (2012) Joint English Education Project between Elementary School and University : Building up Motivation of Sixth Graders While Providing Pre-service Teacher Training. 立命館高等教育研究, 12, 197-208.
- 10) 花崎 一夫・花崎 美紀・植木 宏・藤澤 翔 (2016) 大学生の英語科指導における内発的動機付けおよび社会への関心を高め、地域との連携を強める試み: 松本子ども留学の中学生との中大連携を通じた内発動機付けと学習支援、および地域連携. 地域ブランド研究, 11, 61-68.